

【考察】 正常例と比較して重複下大静脈例の下大静脈では左右とも弾性線維が多く、平滑筋が少なかった。圧力の高い動脈では弾性線維が多く、圧力の低い静脈では弾性線維が少ないことから、重複下大静脈例の下大静脈ではより静脈圧が高く、弾性線維が発達したことが示唆された。そのため、重複下大静脈を有する例では下半身の血液が正常例に比べて心臓に戻りにくいことが推察された。

8-2.

新型コロナウイルス感染症流行期における医学生・看護学生の手指衛生実施状況

(医学部医学科 6年)

○植野大空斗、鈴木 堇

(東京医科大学：公衆衛生学分野、東京医科大学病院：感染制御部)

町田 征己

(手稲溪仁会病院：臨床研修部)

臺 剛一

(東京医科大学：公衆衛生学分野)

菊池 宏幸、井上 茂

【背景・目的】 新型コロナウイルス感染症パンデミックは2021年現在も継続している。感染拡大を防ぐためには市民の予防行動の実施が重要である。手指衛生は接触感染予防のための基本的な予防行動である。医学生・看護学生は一般市民より高い水準での手指衛生の実施が期待されるが、その実態は明らかではない。そこで本研究は、新型コロナウイルス感染症流行期における東京医科大学在学中の医学生・看護学生の手指衛生実施状況を明らかにすることを目的とした。

【方法】 本研究は横断研究である。2020年4月7日から9日に、東京医科大学に在籍する医学部医学科・看護学科学生に対して学内専用ページ上でインターネット調査を実施した。日常生活において手指衛生を実施すべき代表的な5つのタイミング(帰宅時、鼻をかんだ後・咳・くしゃみをした後、調理の前後、食事の前、マスクを着ける前と外した後)での手指衛生の実施状況を4段階(毎回行えている、だいたい行えている、ほとんど行えていない、全く行えていない)で評価した。毎回行えている、だいたい行えていると回答した者を手指衛生を実施して

いる者と定義し、その実施率を明らかにした。

【結果】 有効な回答を得た438名を解析対象者とした。5つのタイミングでの手指衛生行動の実施率はそれぞれ、帰宅時：89.7%、鼻をかんだ後・咳・くしゃみをした後：39.1%、調理の前後：83.8%、食事の前：73.5%、マスクを着ける前と外した後：56.8%であった。

【結論】 医学生・看護学生においても、日常生活における手指衛生の実施状況は一般市民と同程度であり、改善の余地があった。特に鼻をかんだ後・咳・くしゃみをした後、マスク着用の前後における手指衛生の実施率が低く、手指衛生を実施すべきタイミングに関するさらなる啓発が必要である。

8-3.

動画共有・分析・コミュニケーションツール(SPLYZA TEAMS®)を用いた「医療面接」と「プレゼンテーション(上級医への報告)」教育の実践

(医学教育学分野)

○野平 知良、三苫 博

(教育IRセンター)

油川ひとみ

【背景】 「医療面接(MI)」と「ショート・プレゼンテーション(SP)」は医学生だけでなく初期・後期研修医から専門医に至るまで臨床に携わる全ての医師にとって必須の能力である。しかし、いずれも効果的な教育方法が確立していないため、各診療科で工夫して実践している現状がある。本学産科婦人科では2021年5月より動画共有・分析・コミュニケーションツール(SPLYZA TEAMS®)を用いたMI・SP教育を行ない、同分野における有用性と他の精神運動領域への応用の可能性を認識したので具体例とともに報告する。

【対象・方法】 2021年第I期から1回/週の模擬MI・SPを行い、その模様を撮影し「e自主自学」にアップロードした。第V-VII期(23名)は、アップした動画のシーン毎にSPLYZA TEAMS®を用いて学生・教員からのコメントを書き込んだ。模擬MI・SPは1回終了するごとにVSOPモデル(大西)で形成的評価を行なった。以上のデータより
① VSOP評価結果を点数化(V=1、S=2、O=3、